



尾張又寄仙
全

伊地知文庫
文庫20
338



文庫二〇

338

伊地知氏書冊



笠をて長逢のふくむるの衣衣の
もほりて農のうへにまはせり
徒はうたるこゑ人衣はけり
おほるこゑちむのくねぢぢぢ
園へしゆりてふふ園ぢぢ

いそりりけり

ねむこがらけ身をけ行ふこい

芭蕉

舟もせもりけり家のい茶花野水
有るのさゆり酒をうらうらとく荷兮
のうらけ身をまもるふあのもく重五
朝鮮のほりてはまはりあはれ杜國
白ほちあはくは野へ茶を菊 正平

わのいおとを巻にまわらぬあしめく 野水
髪もやまを志のあ身のりて 芭蕉
りりものつゝも乳を志あめと 芭蕉
こえぬあしめくすこくもあく 芭蕉
新法カケホのあつたあしめく火と燭燭く 芭蕉
あしめくあしめくあしめく 虚家カラエ 杜因
田中タナカのあしめくあしめくあしめく 芭蕉
あしめくあしめくあしめくあしめく 野水

あしめくあしめくあしめくあしめく 杜因
あしめくあしめくあしめくあしめく 芭蕉
二のあしめくあしめくあしめくあしめく 野水
あしめくあしめくあしめくあしめく 芭蕉
あしめくあしめくあしめくあしめく 野水
あしめくあしめくあしめくあしめく 芭蕉
あしめくあしめくあしめくあしめく 野水
あしめくあしめくあしめくあしめく 芭蕉
あしめくあしめくあしめくあしめく 野水
あしめくあしめくあしめくあしめく 芭蕉

望ぬ夢て毎程みそ時と心何處 寄る
そのうらむとやうくいふより唐 昔 於此
志うくもと砕けらるる人の骨の向 此國
鳥賊ハ多しとの國此れはうらむ 事又
あふれに此謎とととらう 郭公 野み
秋水一沖一とらうくも夜と 芭蕉
日赤の赤子白う坊く月をみんて 重臣
中しく不槿なるといひ琵琶抄 寄る

うしの夜とあつぬる此夕と秋と 芭蕉
算一 歎の奥をいふと 芭蕉
わいのつとあまの星とあまの 寄る
うらむとあまの星とあまの 寄る
綾のうらむとあまの星とあまの 寄る
廊下とあまの星とあまの 寄る

新編の壯年

まじりまじりまじり

まじりまじりまじりまじりまじり

整水

まじりまじりまじりまじりまじり 食 杜國

まじりまじりまじりまじりまじり 芭蕉

まじりまじりまじりまじりまじり 荷弓

麻呂の月神と鞆靴とふりまじり 重五

施るまじりまじりまじり 貞徳の 寔 正平

るう遊る深き水の田圃わらうて 杜園
奥のこけはくまの紙只なまのく 笠水
床もまうく流連しいとたまる男 荷
縁さゆきけ此恨このわら くら
はかしく痛をまらさる地わらふよ 水
明日をうらこまにさび道わらう ぎ
か三たうく盃くらあはくく 芭蕉
月夢くまのれ牡丹 ねんく 杜園

繩をふのがわらぶれ習落く ぎ
あけくわらわら比花切町 荷
物うらまらせも花娘のひのき 杜園
ふあいららぬをそのハ 水 ねん
櫛くこに舞をゆらゆらあのおの 水
うらまらさるく家端とあし 第一 芭蕉
藤あつく梢を禿れ葉さるし 水
三線わらう不破のせま 人 水

るすうらふ失徳ておやう基とてさき
祢とせしくのさくしと 七十 杜國
奉かめ原のまよりくまうらめあひ
ふや川の傘下奉わらん
蓮池く遊のふゆふ夕まゝ 杜國
やまにまつら 落極まとも 燈水
月くまうら唐物の燈は赤桂て 荷
急とぬぬぬ臨濟とも 川 燈

秋蟬さる虚く静とてくまのく 燈水
月の實つてふま ちちり 灯
後より夜をひらきとこのまに 芭蕉
花よわを典侍の馬の由 杜國
ここの花 鸚鵡 尾おのれ 燈
—— 燈のそと心 越の福活 灯

つゑをひく事僅く

十歩

清く是をひく月とわあらす露のさ 杜國

こわのぬきり 水のいさすく 重五

苗原の露を初霜人かきし 野水

山の川門を初 馬糞 芭蕉

馬糞搔あふらん 風のちかす 荷兮

茶花後者か 正平

新くきりけと物む娘うつとてきこ
燈籠もくりこなまきとらある杜園
つゆ秋のすゆふ力お撰りしあき蓮
蕎麥とく青く一 流質系カウキの物 野水
物月夜双六りの様おとく 杜玉
お茶買クラみせらにほとこおとく 荷
志ゆふはのわきとく 雛を地おとく 野水
と御婦のまようわ茶あんとこすま又

すう死まてはほの吹くろれ行 荷
佛イ食イするも真解ホトい ずら 芭蕉
縣あるともいんひふと 仰の杖とく 手又
又形イ莖イさん 島六 又 也く
くせりーすに轉るを産らわぬ 芭蕉
真イ豆の馬り秘あるいりや 野水
おつとく物や夫刻の稿えあつとく 杜園
ニ庄を金はんやい ちまて道ゆめ 荷

捨しふるを柴前長タチのふつと 妙水
晦日ミカとこむく刀賣り年一 夏
手らの紀吳孤國の笠をとりま 荷
襟しりる雄の片袖をとく 冬
あこ人も持たぬ棺と吞ぬと 夏
芥子のぬくく名とるは禪 杜
三月の東を暗く後の縁 芭蕉
好遊のけく琴文と 者 妙水

烹ふぬりたぬるしてと放る 杜
洋よみ本念佛教ぬるつる 荷
のけすもは燈より一に起倦く 野水
あふの心も夜風の帯引 冬
あふれ飛たすも花はれうらま 荷
すのちとふりぬぬぬぬぬぬ 冬

なす波はくあ〜火燭を
よ〜

炭賣此ものす〜

重五

ひ〜

磨トキ寒サム

荷カ

花蘇馬骨のすお〜

杜國

鶴りん〜

野水

う〜

芭蕉

花織り〜

羽笠

賀茂川や明磨千代糸の微とて 侍
 いそらのの聲なきのしりぬる 重臣
 ねふと布操奇しくわたりし 野水
 しのぶをさるさちを越る三平 ニルカホ 杜國
 於らけくわたりて鴛鴦離る 羽笠
 火とぬ火燧おふ人と見え 芭蕉
 門守の翁に身みこりて寝る 芭蕉
 血刀くはげ月の傍に 芭蕉

芳乃て本郷の露とて 杜國
 ふゆから納豆をくくがらみ 妙水
 とくしく泣極の懣とてそら 芭蕉
 僧とのいそ次歎をなむ 香 羽笠
 白燕帰るぬゆいおと流る 芭蕉
 宣言がくこく釵と綴り 芭蕉
 十一年と三つを童母のらて 芭蕉
 ながらそらそら七夕のすく 杜國

西あゝ桂枝のしののめとて
蘭のあふりく トホク音 芭蕉
踏さるる一はなびりたりし
物籠に葉をたけふ日のこれ 荷引
くやわあゝ 移るる正月く 杜園
清く深き向る 舟をさるる文 舟水
寅のりる月とを 搬治れ急ぎく 芭蕉
こゝろりしよ 南 糸 の地 羊 羽豆

いつて誰とてあゝ人の像 荷引
涙くはる海にさゝるる本芥の根 芭蕉
粥すはあゝま 花びらこまわ やし
宿を女のたて 控ふは 風 芭蕉
小糸のたてく 簾のやわく 羽豆
袖くまゝの夢とて 青らるるむら 杜園

田家眺望

雲月や鶴カラのイ々ツラあふひあそ荷兮

多々此物りさるあふひかなりや芭蕉

樞檜山丸の体とふれ葉露重五

ひ葉ささるしれ塩とわれつ杜國

音まのり具足く月のすく羽笠

酌コもろ童コ糸切コいコ埜水

秋のころ猿如連歌いよりのり、
 遊ぐくもれ多事一富士にゆる寺 荷子
 麻として椿花の落る音 杜國
 茶く系遊たれくゆる風の香 守又
 雉追に烏帽子れ女又三 十 船水
 庭うー一本芳化くくらの落衣 羽豆
 ふ川ありよ山橋くはくくらん 荷子
 麻うわとつふ舟の集 ぬい 杜國

江とをく獨采菴とせは拾く 守又
 家月出く身そかあろりゆ 杜國
 ちるの衣帯く一落花と井拂 羽豆
 籠輿ゆる波木瓦のふあは 船水
 骨をたえくく^{ツロ}洞くくくあ 守又
 乞食は養とくふ志の先 荷子
 涙のくは屋を引鯉を捨んはく 杜國
 所幸く進じみれみくく 守又

下にてろろ卒此小角豆の花はり
 菅屋中よりくに炭團はく 白羽笠
 芥子あまき此小坊交わし打むか 荷了
 おびくこころのみきとら連地實 志兼
 志のこころく飯量のみく月のあ 志兼
 病とくこころく風やうのりし 社國
 釣橋より屋根のしきとら片庇 雨笠
 豆腐つくりて母きん喪く 入 那水

之政より茶此後と破ぬへし 志兼
 伏し木橋の落しはとらし 雨笠
 いろ物とて男猫いより捨てて 社國
 芥のちらすれ雪とてとらふ 志兼
 水干とて秀方の聖りやうく 雨山
 山茶花白小笠此こころ 雨山

追記

けうくろんよと産雨しとる叢
 樽火くあつろくしなるの松待
 こくし下^カ表に髪をたはんとて
 樽互くまなふるのし船あ
 船く蛤かりし月色 海
 かくりく橋をきくの岐阜山 葎水

貞享甲子歲

京寺町二条上九町

井筒屋庄兵衛板

